

本を前に君子さんの思い出を語り合う谷口政春さん(中央)、金丸幸さん(右から2人目)、三好伸子さん(同4人目)ら—京都市左京区



老老介護24年の記録本に

半世紀にわたり京都市内で地域医療に尽くしてきた内科医が、認知症の妻の在宅介護を訪問介護員(ヘルパー)と二人三脚で続けた記録を書籍「ヘルパーが支えた老老介護24年」にまとめた。自宅での暮らしが危うくなるたびにヘルパーの創意工夫が家族を支え、関係者全員で解決の道を見いだした。本では発症時からみどりまでをヘルパーや家族

京の元病院長

の記録と寄稿で丁寧につづっている。

元堀川病院院長谷口政春さん(95) 左京区は、「わらじ医者」と親まれた故早川一光さんとともに西陣の地域医療に取り組んできた。2013年に88歳で亡くなった妻君子さんは64歳の時に認知症を発症。谷口さんは病院勤務の傍らヘルパーの助けを受け君子さん

ヘルパーと二人三脚、家族支え

の介護を始めた。発症間もない頃、君子さんには孤独感から頻繁に徘徊が見られたが、ヘルパーと一緒に演歌や刺し子といった新しい趣味を楽しむことで豊かな日常を取り戻した。手記を寄せたヘルパーの金丸幸さん(79)は「あの頃は、世間に認知症への理解がほとんどなく、手探りの毎日だった」と振り返る。

家族とヘルパーの思いがすれ違った時のことも詳しく書き、谷口さんの長女三好伸子さん(64)は「きれいごとだけでは他の人の参考にならないと思った」と語る。数々の困難に対して、常に掲げていたのは「ピンチは新しい工夫が生まれるチャンス」というモットー。常に最善の方法を全員で検討し続け、君子さんは「くなるまで自宅で暮らした」。

死去から6年を経て出版が実現し、谷口さんは「ヘルパーさんの笑顔にいつも元気をもらっていた。本が在宅介護をする人の参考になれば」と話している。かもがわ出版、17280円。

(太田敦子)